空間・社会・地理思想 4号 94-108頁，1999年
Society, Space and Geographical Thought

母なる大地の(再)描画
——環境フェミニズムに関する地理学的な視点——

キャシー・ネスミス*，サラ・ラドクリフ**
（山元 貴継***・神谷 浩夫**** 訳）

C. NESMITH and S A RADCLIFFE
(Re)mapping Mother Earth: a geographical perspective on environmental feminisms.
Environment and Planning D: Society and Space, 11, 1993, pp. 379-394.
© 1998 Pion

要旨 近年盛んになりつつある女性と自然、環境をめぐる言説は、環境フェミニズムあるいはエコフェミニズムという総称でくくられる。環境問題に対する地理的アプローチを発展させるために、環境フェミニズムによって提起された諸問題に対する批判的検討が行なわれる。地理学の読者に対して環境フェミニズムの原理を手短かに紹介したのち、将来の地理学的研究のための三つの領域が概述される。それは、第 1 に自然と文化、ジェンダー、第 2 にグローバルな開発と環境とのジェンダー化された関係、第 3 にジェンダー化された景観とアイデンティティの問題である。とくに、フェミニズム地理学と文化地理学的考察は、環境フェミニズムのアプローチの将来的な発展に対して重要な扉になると主張される。

1 はじめに

地理学では自然と環境の概念が中心的な位置を占めるため、とくに「景観」に関する女性とジェンダー、自然との関係に対する理論的な諸側面は、地理学者にとって多少なりとも関心事となってきた(Ford, 1991; Kolodny, 1975, 1984; Monk, 1984; Norwood and Monk, 1987; Porteous, 1986; Rose, 1991; Schaffer, 1988)。しかしながら全般的に、女性と自然の関係は、地理学において一瞥を与えられる以上のものではなかった(例えば Bowlby et al, 1989; Smith, 1984, pp. 13-14 を参照)。事実、ラディカル地理学者による自然そのものに関する理論化は、空間の理論化よりも遅れていた(Fitzsimmons, 1989; Wisner, 1978)。この状況は、近年における地理学の理論的焦点として空間に与えられた、特別な位置に関係しているだろう。今日、多くの地域で環境が危機的な状況へと向かいつつあるため、地理学者による自然の強調は、時代の要請のように思われる。わたしたちが以下で主張するように、こうした方向性には、従来の環境フェミニストの主張と持続的に対話することが必要である。ここでは、環境フェミニズムに関する議論を、ジェンダーと環境にまつわる問題への地理学的アプローチを明らかにするために利用し、また同時に、従来のフェミニストの著作における環境に対する観点の欠如を克服するために、地理学のフェミニズムと社会文化地理学における近年の成果も活用する。

女性と自然、環境をめぐる台頭しつつある理論や議論は、環境フェミニズムあるいはエコロジカル・フェミニズムと呼ばれる(また、「エコフェミニズム」や「フェミニスト・エコロジー」とも呼ばれている)。環境フェミニズムは、学問的様式と非学問的な様式(例えば詩、フィクション、ジャーナリズム)の斬新な混合から構成されることが多く、第三世界の開発問題(Shiva, 1988)

* サイモンフレイザー大学 ** ケンブリッジ大学
*** 名古屋大学・院 **** 金沢大学

から、女性の精神性(本稿では精神的環境フェミニズムと呼ぶ)(Spretnak, 1989; Starhawk, 1989)、現代環境への関心(Biehl, 1991; Peterson and Merchant, 1986)、哲学的論争(Plumwood, 1988; Salleh, 1984; Warren, 1987, 1988, 1990; Zimmerman, 1987)まで多岐にわたる。環境問題に対して地理学的アプローチを試みる際に、わたしたちは、昨今の環境フェミニズム理論に対して批判的な検討を行なう。なぜなら、これらのアプローチは、エコロジー研究に関する広汎なフェミニストの視点を提供するからである(第 2 章)。環境フェミニストのアプローチでは、男性と女性、自然と文化、先進国と低開発国の関係が、理論と実証のなかで改めて結びつけられる。これら環境フェミニズムに対する批判は、近年のフェミニズムおよび文化地理学研究[1]に触発された、新しい理論と実証を生み出すための基盤となる。具体的には、地理学に対して興味深い洞察を与える環境フェミニズムの三つの視点に着目する。これらの視点とは、人間と自然の関係のジェンダー化(第 3 章)、グローバルな開発のジェンダー化された関係(第 4 章)、景観のジェンダー化(第 5 章)である。

2 エコロジーの視点:フェミニズム的観点の必要性

環境についてのジェンダーを意識した新たなアプローチに対する基盤を提供するには、環境フェミニズムの根本について概略を述べる必要がある。一方では<男性>と「文化」のあいだの、他方では女性と「自然」のあいだの推測的な関係に関するひとつの見方を発展させることによって、環境フェミニストは、こうした分類を根本的に概念化し直すことを主張してきた。環境フェミニストの立場は、環境の分析のために四つの具体的な論点を提示してきた。まず第 1 に、女性の抑圧や支配と自然の搾取との間には、重大な関連性が存在している。第 2 に、これらの関連性の本質を理解するには、女性の抑圧と自然の搾取についての十分な理論化が必要である。第 3 に、このように結びついた同時的な支配のために、女性は自然の搾取を止めることにとりわけ関心を示してきた。第 4 に、このように結びついた支配は、環境保護主義とフェミニズムとの連携を生み出してきている。

ジェンダーを意識したアプローチについてZimmerman は、以下のように主張している。すなわち、表面的にはディープ・エコロジストあるいはラディカルな環境保護主義者は、「抽象的で二元論的かつ原始的、階層的なカテゴリーが、自然に対する支配の原因であるというフェミニストの見方とほぼ完全に一致しているように思える。けれども、別のレベルでいえば、ディープ・エコロジストによる人間中心主義への批判は、自分たちの男性中心主義には向けられていないのである」(1987, p. 37; Salleh, 1984)。環境フェミニストによれば、ディープ・エコロジストの支持者の多くは、男性主導の社会関係の中で仕事を続けている。例えばフェミニストたちは、エコロジストが環境危機の原因として総称的に用いる「人類 man」という用語や、女性の抑圧と自然の関連に対する認識の欠如、それによって影響を被るであろう女性の要求やニーズに配慮しない産児調整策を指摘している(Salleh. 1984)。ディープ・エコロジーとフェミニストの視点の違いを明確にすることによって、フェミニズムが新しい視点を確立しうる方法を明らかにできる。Warren が述べているように、「フェミニストという用語を加えなければ、『エコロジカル』フェミニストが拒否してきた男性的な偏見など、あらゆる偏見を含んでないかのように、環境倫理を提示することになるだろう。つまり、女性と自然という二重の抑圧の結びつきに気づかないことは、男性ジェンダーの偏見なのである」(1990, p. 144)。環境フェミニズムの発展は、自然、環境、性差に関する西欧的な観念の背後に存在する二元論、階層、支配という概念的問題への注目と深く関わってきた(Warren, 1991を参照)。環境に関するフェミニストたちの著作における、実際には多様な哲学や理論基盤を貫いているのは、こうしたテーマなのである。

従って環境フェミニズムは、エコロジーの視点に対し批判的なだけでなく、従前の西欧のフェミニスト理論に対しても批判的であり、フェミニスト理論家たちはエコロジーを理解していないと主張している。Warren(1987)は、環境フェミニズムの観点から、西欧フェミニスト思想の四つの主要な流れ(リベラルフェミニズム、伝統的マルクス主義フェミニズム、ラディカルフェミニズム、社会主義フェミニズム)[2]の有効性を評価した後に、これらのどの流れも、エコロジカルフェミニズム理論の発展にとって十分な基盤とはなり得ないと主張している。Warren の主張によれば、「変化を生み出すフェミニズム」というオルタナティブは、

フェミニズムのアプローチとエコロジカルなアプローチを統合し、「自然主義 naturism」の政治すなわち、自然の支配に反対する政治、「フェミニストの連帯に重要な要素」として、その他のサバルタン(ジェンダー、人種、などによって抑圧された人々)に対する支配にも反対する政治と結びついている(1990, p. 132)。

第三世界のポストコロニアルな観点から主張するShiva(1988)は、メタファーという領域を拡大させ、それによって西欧の男性－女性、自然－文化といった観念に異議を唱えた。ジェンダーと自然という別の象徴体系としてインド(とくにヒンドゥー教徒)[3]の宇宙観を引用して、Shiva は、西欧哲学を支配する二元論に反対している。Shiva によれば、ヒンドゥーの人間－自然観念は、男らしさのプルシャ *purusha* と、女らしさのプラクリティ *prakriti* という概念に要約される。これらの概念は、西欧思想におけるような対立したものではなく、「一体のなかの二重性」である(p. 40)。彼女は、階層的なカテゴリーを打破するために、男らしさと女らしさの二分法的ではない理解を主張する。

> こうしたジェンダーを基盤としない哲学においては、女性性の原理は、女性の中だけに具現化しているものではなく、自然と、女性と男性の中にみられる活動性と創造性の原理なのである。実際には、男性性と女性性、人間と自然、プルシャとプラクリティを区別することはできない。それらは互いに違っているものの、ひとつの存在の両面であり、弁証法的な統一の中で切り離すことができない(p. 52) 。

しかしながら、Shiva の主張する「一体のなかの二重性」という観念は、西欧のジェンダーや自然のカテゴリーの持つ多くの特徴を模しているように思われる。すなわち、男らしさとは、女性ではないこと、つまり、非女性しか理解できず、両者は互いに密接かつ複雑に結びついているため、相互に結びついた二つの部分を持った統一体と類似している。

地理学者にとって興味深いのは、環境に関するフェミニストの著作には三通りの観点がみられ、それらは、環境－人間の関係、開発－環境の関係、ジェンダー化された景観とそれぞれ結びついている点にある。人間－環境関係という第 1 の観点は、環境フェミニズムによれば、西欧の伝統の中で様々な著者によって明確に構築されているものである(第 3 章)。第 2 の観点は、環境フェミニズムの主張によれば、工業化した第一世界の「(負の)開発」がエコロジカルかつジェンダー化された過程である(第 4 章)。第 3 の観点は、エコフェミニズムがアイデンティティと景観の問題に関して新たな視点を与える、とするものである(第 5 章)。

環境フェミニズムが全般的に主張しているように、ジェンダー化された階層的かつ環境搾取的な社会を理解するには、フェミニズムと環境保護主義の折衷が必要である(Agarwal, 1992; Warren, 1987)。それゆえ、環境フェミニズムが、環境についての新しい批判的地理学の発展に寄与するに違いない固有な哲学や政治やアイデンティティを明らかにするという主張が呈示される。以下の章では、環境フェミニストの立場の強みと弱点が近年の地理学研究に照らしあわせながら考察される。これらの研究は、本質主義的で西欧中心的な環境フェミニズムが提起した問題に対して解決策を提案しうるだろう。

3 ジェンダーと自然: 人間－自然関係のジェンダー化

「自然な」女らしさと自然に対する男性的支配という観念をめぐる、歴史的および最近の議論のフェミニストによる書き直しは、近年において発展しつつある(MacCormack and Strathern, 1980)。「女性」という根強い家父長的な観念に対して、環境フェミニストの研究は、自然と文化という二分法をめぐるジェンダーの概念を暴露してきた。したがって、環境に関するフェミニストたちの研究は、地理学における近年の議論と大きな関連がある。なぜなら、環境に関する地理学的研究の基盤をなす考え方は、歴史的にジェンダー化された概念そのものと関わっているからである。環境フェミニズムは、女性と自然との間に築きあげられてきた家父長的(非)対称性といった概念に異議を唱え、それは少なくとも、科学的手法に関するベーコンによる強姦の比喩にさかのぼることができる(Harding, 1986; Merchant, 1980)。環境フェミニズムは、西欧思想における自然とジェンダーとの密接な結びつきに注目し、Ortner の業績を活用することによって同様の批判を展開させた。生物学的理由から、あらゆる社会において女性はより自然に近いと考えられているとする Ortner(1974) の主張は、こうしたカテゴリーを脱構築する最初のステップとなった。Ortner の主張では、自然は、男性の創造物である文化に比べると、いつも低い価値しか与

えられていない。環境フェミニストが指摘するように、女らしさないし女であることを自然と同一視することが、女性を抑圧するために歴史的に利用されてきた。女性の出産能力と生理の周期は、19 世紀において学校から女性を締め出しておく口実として使われるのが常であったし(Sayers, 1982)、最近では、女性の知性を軽視したり就業機会を閉ざす理由に用いられている(中国については Wolf, 1987; 西欧については Sayers, 1982 を参照)。一部の人にとっては、女性の仕事は家庭での出産や育児であると考えるのは、ごく自然なことであった。

当然ではあるが、フェミニズムは歴史的に、女性と自然との間の家父長制イデオロギー的な結びつき、とくに生物学的な女性の形態を有する自然を拒否しようと努めてきた(Firestone, 1971; Wollstonecraft, 1972)。人類学の研究もまた、そうした結びつきがすべての文化において普遍的ではないことを示していた(MacCormack and Strathem, 1980)。現在の環境フェミニストの視点が発展してきたのは、まさに、女性と自然に共通する抑圧についての理解と表象のなかからである。

環境フェミニズムはまた、ジェンダー、自然、文化のあいだの表面上は確固とした関係の歴史性を指摘している。環境フェミニズムは、自然とジェンダーをめぐる対立がわたしたちの環境に対する理解にとってきわめて重要な理由を西欧の伝統のなかに探し求め、疑問を提起してきた。自然とジェンダー、文明観についての西欧の観念の歴史は、「自然」に対する人間性との関係をめぐる政治的活動の変りやすさと、特定の空間におけるその正当化に対して証拠を示している。社会・政治運動家たちは、社会変革と政策的優先事項に関する倫理的論争の中で、自然と文化、人間性に関する特定の観念を利用してきた。さまざまな流派のフェミニストが主張するように、自然と文化に関する西欧の覇権的イデオロギーは、啓蒙思想にその起源を持つことが多く(Bloch and Bloch, 1980)、緊張と闘争の観念に依拠している。それによって文化は、自然の力を威圧し支配している。すなわち男性は、「女性」を含めた自然を従属させ征服することによって、自らを自然から切り離している。最近では、先に述べたように、こうした考え方は環境フェミニズムによって見直しが図られている。啓蒙主義的な社会観に反対する環境フェミニストは、自然－文化－ジェンダーの関係についてフェミニスト的な見解を打ち立てようと試みており、それは必ずしも女性と自然を同じものとはみていない。

しかし、精神的環境フェミニストの中には、女性と自然という結びつきを拒否しない者もいる。むしろ、女性と自然の経験する家長制による抑圧という共通の過去が、共通の絆とみなされ(Merchant, 1980)、歴史的にジェンダー化された自然観を逆転させ、生を授けるものとしての女性と「自然な」環境との独得な結びつきを賞賛する者もいる(Daly, 1979; Griffin, 1978)。女性と大地、そしてその生命力の間の特殊な永続的関係、あるいはフェミニズムとエコロジーの自然な結びつき(例えば King, 1989)を主張することで、何人かのエコフェミニストは、自然－文化の関係や男性－女性の相互関係の別の観念を表現している。啓蒙思想の著者と同様に、これら精神的エコフェミニストは、「自然」に近いところに位置する人間(女性)の持つ特権的な立場として形作られているものから主張を繰り広げる傾向がある。啓蒙思想家は、自然に関するジェンダー差という価値観がはらむ問題に対してほとんど注目していない一方、精神的環境フェミニズムは、(蔑視された)「自然さ」の近くに女性が位置しているという推測を賞賛することで、文化と男性の優位に異議を表明している。「女性」に対するこうしたフェミニストたちの肯定は、自然に与えられた価値を逆転させることで実現される。つまり、「かつては、女性の地位を下げるために用いられた自然の近さは、…美徳として再評価される」(Plumwood, 1989, p. 20)。同様の文脈でReynold(1989)は、つぎのように述べている。すなわち精神的エコフェミニストは、環境に対する「女の」アプローチと「男の」アプローチを区別しており、「女の」アプローチは世界を家庭として見ており、「男の」アプローチは何か別のものに加工される資源や原料として世界を見ている。このことは、「家庭」として世界と向かい合うことが持続可能でエコロジーにも配慮するというエコロジカルな政治的実践を生み出す。

けれども、地理学的な点からみれば、そうした本質主義は問題となる。近年の地理学的研究は、本質的関係に原因を求めたり、その存在を主張することのもつ問題を強調している(Bondi and Domosh, 1992)。この文化地理学的視点から見ると、環境に関するフェミニスト思想は、本質主義の問題と密接に結びついており、あるいは結びついているはずである(Fuss, 1989)。環境

フェミニズムにおける本質主義は、女性を自然と結びつける女性の生まれつきの特質を最小限の本質へと還元するが、それらは男性には存在しないし手に入れることができない。それゆえ、エコフェミニストのアプローチのもつ危険性は、女性と環境との結びつきを説明したり立証するために、そのアプローチが女性の本質的要素だけに還元されてしまうことにある。「本質という(戦略的な)危険性」を覚悟することで(Fuss, 1989)、フェミニズムは、過去において女性にとってきわめて有害であった女性と自然との調和を再び唱えるという危険を犯した。本質主義の傾向は精神的エコフェミニストの文献に氾濫しているが、微妙なニュアンスの違いも見られ、時には本質主義を完全に拒否していることもある。エコフェミニズムにおける本質主義にとって基盤となるのは、「生命を授けるもの」、出産の能力を持つという女性についての観念である。例えばつぎの引用は、環境フェミニストの著作において繰り返される特権化されたイメージの例である。

> 女性の生理の周期、妊娠による痛みの共有、出産の苦痛、授乳の喜び、これらは、自然のすぐ近くにいることの認識を女性が自覚する基盤となる(Salleh,1984, p. 340)。

環境フェミニズムによって明らかにされる女性のイメージには、「自然」を強調したり「自然」と結びつく女性の本質的能力に関するさまざまな言説が含まれる。その結果、環境フェミニズムは、Shiva の立場からイギリスの運動グループである女性環境ネットワーク(WEN)の立場まで、表面上は多様である。イギリスの活発なロビー・情報収集団体である WEN の根底にある哲学は、男性にはおそらく不可能なやり方で女性が自然と結びついているというものである(Vallely, WEN の代表者、私信、1990)。Shiva(1988)もまた、同様の立場をとっている。Shiva の著書の全体的な論調も、本質主義的である。すなわち、女性の原理とは自然に敏感であることであり、女性はそれを持っている。Shiva(1988)は、男性もその能力を持ち、それを発展させる潜在性を持っていると述べているが、彼女の著書はこうした存在論の立場から書かれていないため、そうした非ジェンダー的視点を貫いてはいない。同様に King(1989)は、「反二元論的」なエコロジー政治やフェミニズムの構築を試みているにも関わらず、最終的には、現代を支配する男性的な戦争マシーンに対してオルタナティブを提供する女性と自然の間に本質的な結びつきを見るという罠に陥っている。

これらのイメージや類似した本質主義は、環境フェミニズムにおいて「イデオロギー的な働き」(Poovey, 1990)をかなり果たしている。第 1 にこれらのイメージは、女性のあいだに見られるきわめてリアルな差異を拾い出し、「所与」の政治的基盤や「共通の」政策課題を生み出す。第 2 に、先のそれと関係した文脈においてこうしたイメージは、身体をめぐる本質的な意味とその生物学的能力、つまり身体とは何をなすのか、そしてそれが他の身体とどう違うのか、について仮定を行なっている。そうした結びつきや身体による理由づけの期待と意味は、西欧の家父長制思想の中で長年にわたって築き上げられてきた。それによって本質主義は、有色人種の女性と第三世界の女性を排除してきた。しかし、こうした女性たちが西欧の言説に対して提起する問題は、極めて多様である。エコフェミニストが提起してこなかった問題には、文化地理学やフェミニスト地理学において次第に注目されつつある「人種」や女性の間に見られる差異の問題が含まれる。先進国と途上国における女性の多様な生きられる現実を軽視しているため、エコフェミニズムは、その他のフェミニズムにみられる人種差別や非白人女性への理解の欠如を是正することはないのだろうか？[4]

この本質主義の傾向や世界を男性と女性に分類する必然性に反対する主張が、Plumwood によって繰り広げられている(Plumwood, 1988: Warren, 1987, 1990)。「人間」の意味を再考することによって、Plumwood は、人間という西欧の観念が「外見とはうらはらにジェンダー中立的ではなく、男性的特徴に一致、あるいはそれに収斂する一方で、女性の観念はそれからかけ離れている」、と指摘する(Plumwood, 1988, p. 19)。そうした男性化した主体［関連領域における他のフェミニスト研究にも認められる(例えば、Fraser, 1989; Pateman, 1988)］を克服するために、Plumwood は、人間性の再検討と再定義を主張する。そして、人間を男性化してみる傾向(科学、技術、自然に対する優位性など)と女性化してみる傾向(差異理論家 difference theorists のいう「純粋な女らしさ」、一部のエコフェミニストによる女性の美徳のたんなる裏返し)をともに拒否する。人間性に関するわたしたちの観念や知識の根底にある男らしさの概念から解放されることが、必ずしも「それと

正反対の女らしさの観念」を全面的に採用することにならない、と彼女は主張している(1988, p. 22)。むしろ彼女は、「心と体、合理性と感性、公と私といった伝統的な関連性の二元論」と結びついているという理由から、男らしさと女らしさの両者を批判し、「それらは偽りの選択として拒否されなければならないとする。真のオルタナティブとして必要なのは、伝統的な二分法的ジェンダーカテゴリーと、人間性に関するわたしたちの観念を支える一連の二元論を「超越」することであると彼女は述べている(Plumwood, 1988, p. 23; Plumwood, 1989)。彼女はまた、人間的特質の「非ジェンダー化」を求めている。つまり、人間的特質は二つのジェンダーの一方だけに結びつけられるものではなく、独立した考慮に基づくべきものであるとする(1988, p. 23)。このことは、必ずしも両性具有や性差の欠如を意味しているわけではないと述べているものの、この観念が、「わたしたち人間と人間以外に共通した性質」の再評価を引き起こすだろうと Plumwood は述べている(1988, p. 24)。それゆえ Plumwood にとっては、人間と自然との調和的な関係を作り上げるために、本質的にジェンダー化された構築物を用いる必要はない。

以上をまとめると、「自然」の領域と文化の領域との間の対立は、環境に関する批判的地理学の視点にとって不可欠ではない。素朴な二分法的体系としての男らしさと女らしさ、「自然」と「文化」の間に横たわる深淵を掘り下げ深めるのではなく、ジェンダー、環境、政治、道徳といった問題に対するオルタナティブなアプローチを展開することができる、と他の環境フェミニストは主張している。そうしたアプローチは、環境に対する地理学的な洞察を深めるのに有益である。

4 環境と開発のグローバルな政治

近年のフェミニスト地理学の諸研究と同様に(Momsen and Townsend, 1987; Nesmith, 1991; Radcliffe and Westwood, 1993)、環境フェミニストは、開発と環境に関するグローバルな問題とローカルな問題に注目している。独自の政治実践や政治的立場を保持することで、西欧の環境フェミニズムは、核武装や熱帯雨林破壊といったグローバルな問題と地域医療や汚水・水質汚染といったローカルな問題に取り組んでいる(Biehl, 1991; Diamond and Orenstein, 1990; Peterson and Merchant, 1986; Pant, 1989; WEN, 発表年多数)。西欧の家事労働への注目から端を発し(Hurtado, 1989)、彼女らは、女性に有害であるという理由からタンポンの使用制限や、食品の過剰包装に対する女性の意識高揚、使い捨てオムツ Nappies の代替品を求めるキャンペーンなどさまざまな問題に取り組んでいる。こうした政治行動や関心は、歴史的かつ空間的な位置づけをもったひとつの政治、あるいは一連の政治的アイデンティティとして、地理学的分析がまだ行なわれていない。

地理学者にとってとくに興味深い点は、環境フェミニストが、先進国の開発過程において、これまで別個であった身体と環境政治とを斬新に結びつけたことにある。環境フェミニストの政治活動を、Peterson and Merchant(1986)は、「再生産の政治」と名付けている。なぜなら、環境問題への女性の関与がどのようにしてそのジェンダー役割に規定されているかを検討しているからである。女性は、自分たちの環境に関する政治主張を、日常生活における再生産や女性の家事などにかかわる環境問題にその基礎を置く、と彼女たちは述べている。けれども、Peterson and Merchant によれば、自分の身体と再生産との社会的に構築された関係に異議を唱える政治へと女性が参加するイデオロギー的基盤は、依然として多様である。その基盤は「社会の慈母という女性の役割の受容から…家父長的資本主義的権力の配分を変えようとする戦略」に至るまで、かなりの幅がある(1986, p. 472)。身体とグローバルな開発、環境の問題を結びつける関心には、以下のものがある。第 1 に「生物学的(世代間)再生産」があり、これは、生態系や核兵器の問題に対する関心を高める。第 2 に「家族の(世代間)再生産」があり、それは医療と「ローカルな」環境問題に対する関心を呼び起こす。第 3 に「福祉国家」があり、この体制下では、より良い労働条件や労働基準を求めて、医療や社会福祉、教職に就いている女性がロビー活動を行なう。最後が「再生産労働者としての女性の解放」であり、これは男女平等の地位と、環境専門職や環境科学の変革を目指している。

このようにして環境フェミニストは、女性の身体と、「開発」の幅広い語り、そして啓蒙の階層的ジェンダーカテゴリーのあいだの関係について、根本的な再考と再表明を試みている。このことは、身体および環境とのその関係に関する分析の重要性に注目を向けさせ

る。身体は、ジェンダーや人種、年齢によって大きな違いがあるにもかかわらず、身体的能力、肌の色、形状、文化的刻印(入れ墨、纏足、体毛を剃った足など)の点で特徴的であり、同時にまた、相互に、そして自然と文化の規範的概念とのあいだにさまざまな関係を持っている(MacCormack and Strathern, 1980)。身体に根ざしているため、人々の環境との社会関係は、同じ肉体によって媒介され、この事実に対して環境フェミニズムは一貫して注目を払ってきた。環境フェミニストの図式では、すべての有機体は、「技術と対立する」と考えられている(Haraway, 1991, p. 174)。こうした対立を際だたせることによって(Cocks, 1989)、DNA の遺伝物質によって巧みに再生産される存在であることへの認識を明確に表明している。Haraway(1991)が述べるように、そうした「有機的」言説が生まれたのは、工業化開発モデルに執着し、機械が世界中に普及するようになった 20 世紀後半になってからのことである。けれども、その摂理を(母なる)大地に求めることで、環境フェミニズムは「いくばくかの混乱を巻き起こす可能性の余地」(p. 199)を残している。もはや生産物に対する人間の摂理という考え方には縛られていないため、オルタナティブな政治と個人的関係が、対立的、有機的なジェンダー化された領域の中に存在する、と環境フェミニズムは述べている。

明らかにポストコロニアルな視点から記述している環境フェミニストの Shiva は、一連の問題群を明らかにしており、それは地理学とも関連がある。Shiva の著書である『生きる歓び：インドの女性とエコロジー、生存 *Staying alive: women, ecology and survival in India*』(1988)は、女性の環境政治における核心的問題として、支配と帝国主義を前面に押し出している。彼女の著書は、環境とそれをめぐる政治を形作るグローバルでジェンダー化された諸力に対して一貫して批判的であるために、環境フェミニスト思想の発展に影響を与えてきた。その中心にあるのは、「負の開発 maldevelopment」という概念であり、それは、先進国が主張し実践しているような現在の主要な開発パラダイムに固有な生態系破壊と社会的不平等と定義される。自然への低い評価と「負の開発」による破壊のために、家族を支え生命を育む仕事(家族に対する食物、燃料、水の提供)によって自然と密接に結びついている女性もまた、危害を加えられるつつあると Shiva は主張する。そして、「女性運動と環境保護運動は同一であり、家父長的な負の開発に対抗する重要なトレンドである」(p. 47)と述べている。Shiva のような環境フェミニストの著書は、寡黙な集団を代弁しようとする欲求を示している。環境に対するフェミニストの関心は、土着の人々の視点を評価するようになり、そうした土着の人々の大地に対する文化的な態度は、非搾取的で対等な関係を指向している(Means, 1980)。フェミニズムが排他的であり、白人中産階級の視点であると非難されているため、こうした土着の人々の視点を取り入れることは、現在すでに幅を広げつつあるフェミニズムをさらに幅広いものにすることができよう(hooks, 1984; Spelman, 1988)。1991 年にカナダのバンクーバーで催された女性と環境に関する会議では、発表者の多くが、アメリカにおける土着集団の女性であった(残念なことに、発言者のバランスが崩れていたため、女性と環境の関係に関するその他の意見は発表者が少なかったり、まったく聞かれなかった)。

Shiva は、第三世界の女性たちが環境に対して持続可能で進歩的な政治を保持し、「その心を抑圧されたり植民地化されていない第三世界の女性だけが、自分たちの守ってきた見えざる対立的カテゴリーを可視的にするという特権を持っている」(p. 46)と論じている。「負の開発過程から取り残された」部族の人々や農民は、似たような恵まれた特権的な地位にある(p. 46)。こうした表現は、環境フェミニズムが女性と土着民の自然との関係を美化して描く傾向に批判を投げかけている。地理学者は、「心象地理」を生み出すメカニズムに敏感となり(Said, 1978)、それぞれの特徴を特定の場所にいる人々に帰するようになった(Slater, 1982)。つまり地理学は、女性と自然との関係を理想化して描くことを批判するための道具を提供するのである。このことは、環境フェミニストの著書において、インドのチプコ運動(農村の女性たちが商業的伐採から森林を守るために木々を抱きかかえる運動)から生み出された手法を紹介している点からみても、きわめて適切といえよう。例えば Warren(1988)は、実践に根ざした環境フェミニストの精神の「真実」としてチプコ運動を引用している。チプコ運動の女性は、周囲の環境に直接的に依存した世帯や地域社会の維持に加わっているというよりもむしろ、フェミニスト・エコロジーに思想的に関与していると描かれている(Agarwal, 1992; Ahmed,

1985; Guha, 1989; Jain, 1984)。このようにして環境フェミニストは、他のフェミニズムの立場からすれば、他の女性闘争を西欧のフェミニズムの一部とみなし、堅牢で不動のカテゴリーとしてみなすような運動を押し進める危険を冒している。言い換えれば環境フェミニストは、女性間の差異の問題には注目していない。例えば、「人種」と階級関係のジェンダー化に関するWarren の分析は型通りのもので、女性間の差異の特殊性を疑うことはない。

> エコ(ロジカルな)フェミニストは、ジェンダー、人種、民族あるいは階級的地位による人間の支配を正当化するために用いられているのと同じ支配の論理が、自然の支配を正当化するのにも使われている、と主張する(Warren, 1990, p. 132)。

エコフェミニストのテクストにしばしば引用されているチプコの事例は、環境フェミニズムにおいてこの事例が果たしている政治的な役割に対して疑問を投げかける。これらのテクストの中で、チプコのインド女性たちは、エコフェミニストに代わって、闘争に加わっている困窮した第三世界の女性という役割を演じてはいないのか？ こうした構造は、西欧のフェミニストのテクストにみられる第三世界の女性についての帝国主義コロニアリズムの構築物であると考えることができる(Mohanty, 1991)。

環境フェミニズムにおける理想化の傾向は多様であって、統一がとれていない。Shiva の著書は、そうした美化して描く特徴を違う観点から示している。なぜなら彼女は、農村のインド女性が精神的に自然と調和し、彼女らが自然と結びついていることを自覚していると描いているからである。例えば彼女は、「プラクリティは、難解な抽象ではなく、毎日の生活を導く日常的な概念である」(1988, p. 40)と述べている。Shiva が述べている表現では、このことは正当な主張であるが、当該の女性の言葉による裏付けを伴っていない。第三世界の女性の視点から出発していることは、フェミニスト研究における進歩である。しかしそうした分析は、女性たちが非西欧社会の資源配分によってしばしば底辺化されてきたという事実や、地域文化の中でどのように位置づけられていようとも、女性は完全な「人間」としての地位や属性を与えられていなかったという事実も、考慮に入れなければならない(MacCormack and Strathern, 1980)。すでに明らかなように、農村女性や部族の人々、農民の環境への対処は、生存の必要性に規定されているのではなく、そうした人々は持続可能で生態系に敏感な暮らしを*必然的*に送っている、と Shiva が述べる場合には、美化が行なわれている(Shiva のエコフェミニズムに対する全般的な批判については Agarwal, 1992 を参照)。Raghunandan(1987)は、部族の生活様式に対するこうした態度を批判し、Dietrich(1988)は、貧しい過重労働の農村女性が生態系の破壊から世界を救うやり方を思いつくという推測に疑問を投げかけた。そうした理想化の動きは、おそらく権威づけのための手法である。オルタナティブな政治を呈示する必要が感じられるため、未来社会に関するユートピア的な見方が、いくつかの環境保護の著作のなかで提示されている。理想社会を目指した進歩と発展という叙述は、ポスト啓蒙主義思想において頻繁に繰り返される比喩として再登場している(Boyne and Rattansi, 1990)。

これらの指摘と関連するのが、特権的な視点に対する政治批判の問題である。何人かのエコフェミニストの著書では、女性でないかぎり、あるいは第三世界の土着の女性ではないかぎり、その人の見解は信用できないと主張されている。本稿で述べてきた視点から言えば、ある集団を特別視することは、その視点と実践を定式化するには最適とはいえないカテゴリーへと人々を誤って分断してしまう危険性がある。それはまた、本質主義のジレンマにも突き当たる。というのは、個人や人間集団に関するこうした見方は、単一の確固としたアイデンティティの存在を仮定しているからである。これは、抑圧とアイデンティティ形成が多数の場所で行なわれている現代において、あまりにも単純な仮定である(Harding, 1986; Smith, 1987)。さらに、白人中産階級の女性だけが、精神フェミニズムを含む環境フェミニズムを推進するための時間やお金、心の余裕を持っているというのも、一般的な事実である。そして、環境フェミニズムの視点や実践の中で、彼女らは社会経済的に特権的な立場を享受している。言い換えれば、断片的な視点の連携が推進され得るような、知識や視点の相対的位置づけを認めようとする努力は、環境フェミニズムの中にはほとんど存在しない(Haraway, 1988)。

グローバルな開発の一部を形成するジェンダー化さ

れた環境との関係という概念は、ジェンダーに敏感な分析によって、負の開発というグローバルな諸力と再生産の政治との相互関係に注目することで、環境への地理学的アプローチに対して、新しい視点のための道具を与える。そうした注目は、ジェンダー化された環境との関係と実践のもつ地域的な特殊性や、これらの実践にかかわるアイデンティティの政治を際だたせる。そして後者は、人間性、「文化」の概念、そしてジェンダー化された資源利用の卓越を再確認する役割を担っている。実践的な意味で、環境フェミニズムは、環境資源の女性による利用の分析にもっと積極的に取り組むよう地理学に要求し、環境とジェンダーの政治や意味、実践が、その利用にどのように影響を及ぼすのかという問題を提起している。提起されている問題には、以下のものがある。生態系の問題への意識の高まりやリサイクルと非加工産品の利用の推進は、女性の時間とエネルギーにとってどんな意味があるのか？食事の支度とリサイクルに要する余分な時間は、誰が負担するのか？ これらの問題は、第三世界の「開発」という課題と、どのように関係するのか？ 環境保護主義の政治のジェンダー化は、どのように行なわれ、どんな影響を及ぼすのか？ 「男性的な」の政治運動と「女性的な」の政治運動は、地域によって異なるのか？ このアプローチは、一方のジェンダー(または他の識別可能な集団)だけが環境との関係において優先的なアイデンティティと権威を持っているという単純で危険な見方、すなわち、西欧の歴史において(文明化された男性の)人間性から(自然な)女性のジェンダーを歴史的に締め出してきた哲学、をとらない。環境に対する非西欧的な見方によれば、ジェンダーと自然、文化をめぐる対話が、アイデンティティと行動、主張の連携を空間的かつ時間的に生み出すことを示唆している。

5 ジェンダー化された景観の刻印：環境とフェミニズム、ジェンダー

環境フェミニズムは、ジェンダー化されたグローバルな開発の理解だけでなく、景観やアイデンティティ、ジェンダーの文化的影響といったローカルな問題にも貢献する。ジェンダー的象徴、環境におけるジェンダー化された行為、これらミクロな政治の背後に隠れた権力関係にみられるさまざまな関係を環境フェミニストが重視していることは、新しい批判的社会文化地理学に対する関心という問題を提起している。なぜなら、社会文化地理学は、景観、アイデンティティ、政治的実践への共通の関心によって結びついているからである。

ジェンダー化された身体と環境との関係を理解するためには、人間と資源との間に見られるきわめてローカルで現実的な物質的関係を検討しなければならない(Shiva, 1988; Agarwal, 1992)。けれども、人々は象徴的意味を同じように理解し解釈すると仮定せずに、人々や人間－自然関係、環境に関する文化的および象徴的意味を分析することも重要である。各個人が資源や環境との関係において異なった主体の立場にあるように、意味を持った景観との関係や対応もさまざまである。社会的、政治的、文化的な意味が、景観や空間的関係の中に刻印される様式は、地理学における社会文化的「転回」によって注目されてきた(Philo, 1991)。しかし、物質的なものとイデオロギー的ものを結びつける際に、環境とのジェンダー化された相互関係という問題にはまだ十分な注目が与えられておらず(Ford, 1991 を参照)、それは環境フェミニズムが力説する特徴である。

景観に関するさまざまな考え方によって示されるアイデンティティの一例は、精神的エコフェミニズムの立場である。大地と女性との精神的結びつきに注目することで、何人かのエコフェミニストは、人間と自然との新しい関係に関するパラダイムとして、古代の女神宗教と女家長制社会や女神崇拝社会、とくにヨーロッパのそれに注目している。例えば Starhawk は、「地球に宿る魂は、その価値を知らしめることで精神的エコフェミニズムに影響を及ぼす」(1989,page 174)と述べている。Starhawk が地球の魂と結びつけている価値には、無生物(女神は、自然界の生物と無生物の両方に宿っている)、相互関係(とくに人間と自然との関係)、多様性と慈悲の意義が含まれる。これらの価値から Starhawk は、グローバルな問題とローカルな問題を結びつけ、社会の価値体系を変革することによって、世界的な対立、危機、そして不公正の解決を図るためのフェミニストの実践を提案している。Starhawk(1982, 1989)や Spretnak(1989)が主張する環境フェミニズムの精神的側面を、すべての環境フェミニストが支持しているわけではない。[精神的視点に対する手厳しい批判については、Biehl(1991)を参照せよ。精神的視点は、

Plant(1989)や Diamond and Orenstein(1990)に収められている論文や詩の中に見てとれる。] しかし、自然に宿る魂という考え方に、地理学者は注目する必要がある。なぜなら、魂や神話は力強い知識の形態であり(Matless and Philo, 1991)、「道徳」地理学の概念化にとって不可欠だからである。精神的環境フェミニストの哲学が景観に刻み込まれる様式は、地理学者にとって一大関心事である一連の問題、すなわち、アイデンティティと景観のあいだの文化的・地域的に固有な関係を指し示している。

例えば、女神崇拝に関するエコフェミニズムは、これらの神を具体的な(物質的および比喩的)景観に刻み込む。北アメリカの環境フェミニストに携わる多くの人々にとってきわめて重要なのは、一見したところ「自然な」環境のあちこちに、精神的女神崇拝がジェンダー化されたイデオロギーを特定の場所に刻み込んでいることにある。女性は、特定の場所(例えばクレタ島のミノア文明)や壁画の描かれた洞窟(壁画には女神が描かれ、前史時代の女神崇拝の証拠と見なされる)や墳墓(イングランドの Silbury Hill)、古代の洞窟(その形状からもわかるように、女性器と結びついており、中には赤土色に着色されたものもある)と結びつくようになった。そうした景観は、女性の「力」が特定の場所と結びついている景観である。こうしたジェンダー化された景観の刻印は、何人かの精神的環境フェミニストにとって神秘的あるいは理論的関心事というよりは、むしろ物見高い観光客がヨーロッパの女神崇拝の場所に関する観光ガイドブックを買い求める際に、ツーリズムに関するポストモダン地理学の一要素となっている。こうした関係が表象され明示化される様式は、環境フェミニストの発想や実践に対する地理的理解の重要性を強調しているのであり、将来の研究は、近年の文化地理学において発展している視点から他のフェミニストの景観を明らかにしたり分析すべきだろう。これらの景観は、農村的景観あるいは観光客向けの景観だけでなく、都市の平凡な日常的景観でもある。例えば都市では、メディアの描写や直接体験を通じた「恐ろしい」場所や空間の社会的な形成が、将来の研究課題となるジェンダー化された意味を持つ場所の事例を提供する(Valentine, 1989)。街を女性に取り戻そうという(白人)フェミニストによる運動は、さらには、制度化された人種差別によって特定の景観に押し込められた黒人の女性と男性の排除という地理学的問題も提起する(Bhavnani and Coulson, 1986)。

自然ー文化のジェンダー化された概念の重要性を環境フェミニズムから取り入れるならば、男らしさと景観、文化の生産に関する近年の地理学的研究から得られた見識は、男性の環境に対する実践と哲学の分析にも役立つだろう。本稿の焦点は、女性化した環境との関係に当てられてきたが、景観のジェンダー化(およびジェンダーの環境化)は、*男性の*景観にも起きている。Bly(1990)の著書『屈強な男 *Iron John*』において明らかにされた概念を嚆矢とするこうした精神的エコマスキュリニズムは、「自然」とのジェンダーに固有な関係を明らかにしており、それは多くの点で、初期のエコフェミニストの考え方と対応している。Bly とその賛同者たちは、男らしさ(男らしさ一般であるが、実際には西欧社会に卓越すると考えられている男らしさのひとつのタイプにすぎない)と、「原始的」と認識された空間とを本質的に結びつけている。こうした男らしさ(エコマスキュリニズムであって中性化ではない)の表象において、男性は、儀式がとり行なわれる森林へと退く(Brown, 1991)。一緒になって太鼓を打ち鳴らし、女性を締め出すことによって、男性は、養育の関係を再評価し、「内に秘めた男の野生」を解放することで、自分自身や自分と世界や社会との関係を癒そうとする(Horsfield, 1991)。本来の哲学や実践として表象されているけれども、力強さを取り戻し、「生まれ変わって」社会に復帰するために男性が野生に回帰したり退くという主題は、ユダヤ教ーキリスト教文化においてよく見られる隠喩であり、ギリシャ神話や聖書、ルソーの著作にも見い出される(おそらく文脈だけが変化した。つまりこの場合は、女性が先に森にたどり着いたのである)。「新しい」エコマスキュリニズムでは、男性は、生命を授けるという意味で、自然を再び利用しようとしている(それは、エコフェミニズムが批判する家父長制による自然破壊的なやり方とは対照的である)。そうすることで『屈強な男』のイデオロギーは、「自然」との男性的な関係というかつてのステレオタイプを覆すと同時に再生産する。男性は、野性の空間を取り戻そうとすることにより、自然を制圧するのではなく自然との対話を通じて、世界と感覚的な結びつきを再びとり結ぶために、従来のジェンダーと自然との関係を破壊する。けれども、男性と「野生 the wild」との対

話という相対的に位置づけられたパターンを繰り返し、それを男性の力強さの源泉として用い、男性の空間と規定することで、エコマスキュリズムは、人間と環境との相互作用という既存の西欧の言説に回帰しているのである(Bradley and Phillips, 1992; Cosgrove and Daniels, 1988; MacCormack and Strathern, 1980)。

このジェンダーと自然のイデオロギーにおいては、すべての自然が注目されているわけではなく、「野生」の空間だけが注目されている。こうした「野生」の場所は、男性の若返りや結束、団結の場となる。女性は、この景観に適していないし、帰属していないし、立ち入りを禁じられていることさえある。これは、女神の刻印された景観とは正反対である。精神的エコフェミニストや「エコマスキュリニスト」は、景観のジェンダー化をめぐって意見が対立している。それゆえ、男性の運動の高まりは、一部の環境フェミニストが抱いているような自然との感情移入的な男性を排除した関係に対して異議を唱えているのである。

6 結論: ジェンダー化された景観への空間的刻印

こうしたフェミニズムと環境保護との結びつきは、どんな新しい方向を目指すのだろうか？ 批判的な社会地理学とフェミニスト地理学は、これに対してどんな立場をとり得るのだろうか？ これまでの議論の中で、わたしたちは、環境に対する近年のフェミニストのアプローチに潜むさまざまな問題を示唆し、将来の研究方向を暗示してきた。地理学において、人間と環境の関係は長年にわたる関心事であったにもかかわらず、新しい文化社会地理学の中では、こうした分野はあまり発展をみせてこなかった。わたしたちが環境フェミニズムへ批判的に関与する必要性を感じているのは、地理学の中のこの分野なのである。環境フェミニストの思想は、多くの分野における地理学的議論に貢献する考え方を含んでおり、それは、環境保護主義だけにとどまらず、景観やアイデンティティ、環境政策、環境政治といった問題とも関係している。先進国と第三世界との間における、資本主義と環境とのジェンダー化されたグローバルな関係の把握に関心を寄せる地理学者は、こうした著作から洞察を得ることができよう。それゆえ、エコロジーとフェミニズムとの結びつきは、実践とイデオロギー、アイデンティティのレベルにおけるジェンダー関係と環境との連関に対して、これまで以上に大きな地理学的関心をもたらすだろう。これまで議論してきたように、エコロジーの視点の中には、(人間に関連して)フェミニスト的要素も平等主義的要素も本来的にはまったく存在しないことを地理学者は学ぶであろう。他の少数派集団の視点と同様に、女性の視点にも耳を傾ける必要があり、環境資源に対するこれら少数派集団の特別なニーズを明らかにしなければならない。同様に、ジェンダー関係の分析に没頭するフェミニズムは、女性と自然との外見上の結びつきにもかかわらず、環境問題に必ずしも適しているとは言えない。エコフェミニストは、これら二つの主張をうまく結びつけており、環境に対する新しい地理学的アプローチのさまざまな要素を提案している。

対照的に、地理学はエコフェミニストのアプローチに貢献する諸要素を有している。環境に対する地理学的な視点は、これまで環境フェミニストが注目してこなかったグローバルな問題とローカルな問題の両側面に注目している。例えば、ジェンダー化された環境に対する地理学的な視点は、当然、都市の分析や技術の分析を含むだろう。これらはともに、従来の環境フェミニストの説明において見落とされてきたのである。それゆえ批判的地理学は、環境を、自然と「男性の製作物 *man*ufactured thing」に分かつべきではない。なぜなら、わたしたちが暮らす環境は、「男の作ったもの *man*made thing」と再生産能力を持ったものとの合成だからである。こうした点から見れば、「非分解物質」や工業化という支配的な開発モデルに対する反対運動を含んだエコフェミニストの視点は、地理学的アプローチに類似しているだろう。さらに、ポストコロニアリズムや差異をめぐる新たな地理学的論争は、環境フェミニズムの研究に対して重要な貢献をするだろう。本稿で述べた議論は、ジェンダー化された環境のもつさまざまな関係とイデオロギーが、空間上に展開し特定の景観の中に見られることを述べてきた。社会的差異、人間－自然関係のイデオロギー、道徳地理学 Moral Geographies(Philo. 1991)は、景観の中に刻印されているのである。環境フェミニズムはわたしたちに対し、こうした景観やその刻印が、心象においても日常の実践においてもジェンダー化されていることを思い起こさせる。このような特徴は、文化社会地理学における新しい研究課題のなかで中心的な位置を占め、実践的関

心と理論的関心に根ざしている。理論的なレベルでは、環境に対する批判的地理学のアプローチは、環境に関する実践、イデオロギー、主張、社会化、(自己の)表現におけるジェンダー差を分析するであろう。そうした要素を考慮に入れることは、自然と文化や男性と女性を階層化することなしに、女性間の人種的分断、階級的地位、その他の差異化の過程を認識することを意味する。人間特性と人間以外の環境特性の関係の再評価、そして環境フェミニズムが明らかにした人間性の規定は、環境と景観に関する建設的でフェミニスト的、非西欧中心主義かつ非階層的で持続可能な見方と実践に貢献するに違いない。

謝辞　環境フェミニズムに関するわたしたちの研究は、特定の空間的文化的環境の内部でのフェミニストの知とジェンダー化されたアイデンティティの位置の問題に関する読書会において、さまざまなエコフェミニストの思想にふれたことにその発端がある。わたしたちは、ケンブリッジ大学の「エコフェミニズム読書会」の参加者全員、とくに Andrea Doucet, Sara Ahmed, Anne-Marie Goetz に対して深い感謝の意を記したい。彼女らの議論と論点は、本稿のなかに反映されているが、本稿の内容に関して一切の責任は筆者たちにある。Jennifer Bain にも、文献作成に際してその助力に感謝する。また、Simon Fraser 大学地理学科における本稿のセミナー発表に参加し、発想豊かなコメントを寄せてくれた同僚や大学院生の皆様にも感謝申し上げます。

注

1)多くの論文と同様に本稿は、個人的かつ政治的な営為であり、批判者と筆者というわたしたちの立場は、なにがしかのエンパワーあるいは反エンパワーを行なうという意味で特定の位置を占めている。本稿の執筆にあたり、わたしたちは、資源浪費的なポスト冷戦時代の中での自分たちの位置を自覚している。わたしたちは、五体満足な白人であり、アカデミックなポストに就き、籍を置き、ポストコロニアルな「南」(アジア、ラテンアメリカ)で調査を行なっており、そしてまた学術雑誌に論文を掲載することは、オルタナティブな物語を提示する上での自己の「権威付け」の行為であることも認識している(Haraway, 1991)。

2)地理学的フェミニズムの歴史においてきわめて重要な資本主義と家父長制の関係をめぐる議論(WGSG, 1984)を紹介する場合、環境フェミニズムは、女性と自然の(資本主義的家父長的)支配形態における両者の歴史的結びつきに注目している。エコフェミニズムは、資本主義と家父長制の両方に対して環境的な批判を加えている。Merchant(1980)を先駆とする環境フェミニズムは、資本主義と「近代科学」の初期の発展を自然と女性の抑圧に結びつけている(Driver and Rose, 1992)。Shiva(1988)は、このタイプの分析を取り上げ、インドにおける農業や水、森林資源に対する家父長的資本主義的な負の開発の生態系への影響を、これら資源と女性との関係という観点から批判している。

3)Shiva は「インドの」哲学について議論しているが、ヒンドゥー教しかふれておらず、イスラム教や仏教、ジャイナ教、シーク教などインドのその他の伝統的な哲学や宗教にはふれていない。

4)こうした本質主義の批判から、いくつかの警告を拾い出すことが必要である。Fuss(1989)は、純粋な本質主義ないし反本質主義が実際には不可能であり、一方の立場は他方に根ざしていることを示している。さらに、最近の反本質主義に対する絶賛にもかかわらず、わたしたちは身体－男の身体と女の身体－の中の存在するのであり、それらは非常によく似ているけれども異なっている。筆者は、身体に関して唯物論的・構築論的見方を採用し、それゆえ身体は具体的な地理的・歴史的文脈の中で理解される(Ortner and Whitehead, 1981)。

参考文献

Agarwal,B.(1992): The gender and environment debate: lessons from India. *Feminist Studies*, 18,119-158.

Ahmed,S.(1985): The socio-political economy of deforestation in India. OP-29, School of Development Studies, University of East Anglia, Norwich.

Bhavnani,K. and Coulson, M.(1986): Transforming socialist-feminisms: the challenge of racism. *Feminist Review*, 23, 81-92.

Biehl,J.(1991): *Finding our way: rethinking ecofeminist politics*. Black Rose Books, Montreal.

Bloch,M. and Bloch,J.E.(1980): Women and the dialectics of nature in eighteenth century French thought. In MacCormack,C. and Strathern,M . (eds.),*Nature, culture and gender*. Cambridge University Press, Cambridge, pp. 25-41.

Bly,R.(1990): *Iron John: A book about men*. Random House, New York.

Bondi,L. and Domosh,M.(1992): Other figures in other places: on feminism, postmodernism and geography. *Environment and Planning D: Society and Space*, 10, 199-213.

Bowlby,S., Lewis,J, McDowell,L. and Foord ,J. (1989): The geography of gender. In Peet,R. and Thrift,N. (eds.),*New models in geography Volume 2*. Unwin Hyman, London, pp. 157-175.

Boyne,R. and Rattansi,A.(eds.)(1990): *Postmodernism and society*. Macmillian, London.

Bradley,R.and Phillips,M.(1992): Behind every wild man is a happier

women. *The Independent* (United Kingdom), 20 January, page 18.

Brown,I.(1991): New men. *The Globe and Mail* (Canada), 30 November, pp. D1, D4.

Cocks,J.(1989): *The oppositional imagination: feminism, critique and political theory*. Routledge, Chapman and Hall, Andover, Hants.

Cosgrove,D. and Daniels,S.(eds.)(1988): *The iconography of landscape*. Cambridge University Press, Cambridge.

Daly,M.(1979): *Gyn/ecology: The metaethics of radical feminism*. Women's Press, London.

Diamond,I. and Orenstein,G.(eds.)(1990): *Reweaving the world: The emergence of ecofeminism*. Sierra Club Books, San Francisco, CA.

Dietrich,G.(1988): Development, ecology and women's struggles. *Social Action*, 38-1, 1-14.

Driver,F. and Rose,G.(eds.)(1992): *Nature and science: essays in history of geographical knowledge*. Historical Geography Research Series 28, Historical Geography Research Group; available from Withers,C., Department of Geography, Cheltenham and Gloucester College of Higher Education, Cheltenham, Glos.

Firestone,S.(1971): *The Dialectic of sex*. Bantam Books, New York.(ファイアストーン著 林弘子訳『性の弁証法』評論社,1975)

Fitzsimmons,M.(1989): The matter of nature. *Antipode*, 21-2, 106-120.

Ford,S.(1991): Landscape re-visited: a feminist reappraisal. In *New words, new worlds: reconceptualising social and cultural geography* compiled by Philo,C. Social and Cultural Geography Study Group, Institute of British Geographers; copy available from Philo,C., Department of Geography, St David's University College, Lampeter,SA48 7ED,pp 151-155.

Fraser,N.(1989): *Unruly practices: power, discourse and gender in contemporary social theory*. Polity Press, Cambridge.

Fuss,D.(1989): *Essentially speaking: feminism, nature and difference*. Routledge, Chapman and Hall, New York.

Griffin,S.(1978): *Woman and nature: The roaring inside her*. Harper and Row, New York.

Guha,R.(198): *The unquiet woods: ecological change and peasant resistance in the Himalaya*. Oxford University Press, New Delhi.

Haraway,D.(1988): Situated knowledges: the science question in feminism and the privilege of partial perspective. *Feminist Studies*, 14, 575-599.

Haraway,D.(1991): *Simians, cyborgs and women: the reinvention of nature*. Free Association Books, London.

Harding,S.(1986): *The science question in feminism*. Open University Press, Milton Keynes.

hooks,b.(1984): *Feminist theory: from margin to centre*. South End Press, Boston, MA.(フックス著 清水久美訳『ブラック・フェミニストの主張 周縁から中心へ』勁草書房, 1997)

Horsfield,M.(1991): Dancing to the music of the wild man within. *The Guardian* (United Kingdom), 27 June, page 19.

Hurtado,A.(1989): Relating to privilege: seduction and rejection in the subordination of white women and women of color. *Signs*, 14, 833-855.

Jain,S.(1984): Women and people's ecological movement: a case study of women's role in the Chipko movement in Uttar Pradesh. *Economic and Political Weekly*, 23, 1233-1237.

King,Y.(1989): The ecology of feminism and the feminism of ecology. In Plant,J.(ed), *Healing the wounds: the promise of ecofeminism*. Between the Lines Press, Toronto, pp.18-28.

Kolodny,A.(1975): *The lay of the land*. University of North Carolina Press, Chapel Hill, NC.

Kolodny,A.(1984): *The land before her*. University of North Carolina Press, Chapel Hill, NC.

MacCormack,C. and Strathern,M.(1980): *Nature, culture and gender*. Cambridge University Press, Cambridge.

Matless,D. and Philo,C.(1991): Nature's geographies: social and cultural perspectives. In *New words, new worlds: reconceptualising social and cultural geography*. compiled by Philo,C. Social and Cultural Geography Study Group, Institute of British Geographers; copy available from Philo,C. Department of Geography, St David's University College, Lampeter SA48 7ED, pp.39-48.

Means,R.(1980): Fighting words; on the future of the earth. *Mother Jones*(December), 25-38.

Merchant,C.(1980): *The death of nature: women, ecology and the scientific revolution*. Harper and Row, New York.(マーチャント著 団まりな他訳『自然の死 科学革命と女・エコロジー』工作舎,1985)

Mohanty,C.T.(1991): Under Western eyes: feminist scholarship and colonial discourses. *Feminist Review*, 30, reprinted in Mohanty,C.T.,Russo,A. and Torres,L.(eds.): *Third world women and the politics of feminism*.. Indiana University Press, Bloomington, IN, pp.51-80.

Momsen,J. and Townsend,J.(eds.)(1987): *Geography of gender in the third world*. Hutchinson Education, London.

Monk,J.(1984): Approaches to the study of women and landscape. *Environmental Review*, 8-1, 23-33.

Nesmith,C.(1991): Gender, trees and fuel: social forestry in West Bengal, India. *Human Organization*, 50, 337-348.

Norwood,V. and Monk,J.(1987): *The desert is no lady: southwestern landscapes in women's writing and art*. Yale University Press, New Haven, CT.

Ortner,S.(1974): Is female to male as nature is to culture?. In ", Rosaldo,M. and Lamphere,L.(eds.): *Woman, culture and society*. Stanford University Press, Stanford, CA, pp.67-87.

Ortner,S. and Whitehead,M.(eds.)(1981): *Sexual Meanings: The cultural construction of gender and sexuality*, Cambridge University Press, Cambiridge.

Pateman,C.(1988): *The sexual contract*, Polity Press, Cambridge.

Peterson,A. and Merchant,C.(1986): Peace with the earth: women and the environmental movement in Sweden. *Women's Studies International Forum*, 9, 465-479.

Philo,C.(compiler)(1991): *New words, new worlds: reconceptualising social and cultural geography*. Social and Cultural Geography Study Group, Institute of British Geographers: copy available from Philo,C., Department of Geography, St David's University College, Lampeter SA48 7ED.

Plant,J.(ed)(1989): *Healing the wounds: The promise of ecofeminism*. Between the Lines Press, Toronto.

Plumwood,V.(1988): Women, humanity and nature. *Radical Philosophy*, 48, 16-24.

Plumwood,V.(1989): Do we need a sex/gender distinction?. *Radical Philosophy*, 51, 2-11.

Poovey,M.(1990): *Uneven Developments*. Routledge, Chapman and Hall, Andover, Hants.

Porteous,J.D.(1986): Bodyscape: the body-landscape metaphor. *Canadian Geographer*, 30-1. 2-12.

Radcliffe,S. and Westwood,S.(eds.)(199): *Viva! Women and popular protest in Latin America*. Routledge Chapman and Hall, Andover, Hants.

Raghunandan,D.(1987): Ecology and consciousness. *Economic and Political Weekly*, 22, 545-554.

Reynolds,F.(1989): Ecofeminism. *Ecos*, 10-2, 2-8.

Rose,G.(1991): Geography as a science of observation: the landscape, the gaze and masculinity. unpublished seminar paper presented in London, January; copy available from the author, Department of Geography, Queen Mary and Westfield Colledge, University of London, London.

Rose,G.(1993): *Feminism and geography*. Polity Press, Cambridge.

Said,E.(1978): *Orientalism*. Penguin Books, Harmondsworth, Middx.(サイード著 今沢紀子訳『オリエンタリズム』平凡社,1986)

Salleh,A.K.(1984): Deeper than deep ecology: the ecofeminist connection. *Environmental Ethics*, 6 , 339-345.

Sayers,J.(1982): *Biological politics: feminist and anti-feminist perspectives*. Tavistock Publications, Andover, Hants.

Schaffer,K.(1988): *Women and the bush: forces of desire in the Australian cultural tradition*. Cambridge University Press, Cambridge.

Shiva,V,(1988):*Staying alive: women, ecology and survival in India*. Kali for Women, New Delhi.(シヴァ著 熊崎実訳『生きる歓び イデオロギーとしての近代科学批判』築地書館,1994)

Slater,D.(1992): On the borders of social theory: learning from other regions. *Environment and Planning D: Society and Space*, 10, 307-328.

Smith,D.(1987): *The everyday world as problematic: a feminist sociology*. University of Toronto Press, Toronto.

Smith,N.(1984): *Uneven development*. Basil Blackwell, Oxford.

Spelman,E.(1988): *Inessential women: problems of exclusion in feminist thought*. Beacon Press, Boston, MA.

Spretnak,C.(1989): Toward an ecofeminist sprituality. In Plant,J(ed): *Healing the wounds: the promise of ecofeminism*. Between the Lines Press, Toronto, pp.127-132.

Starhawk(1982): *Dreaming the dark: magic, sex and politics*. Beacon Press, Boston, MA.

Starhawk(1989): Feminist earth-based spirituality and ecofeminism. In Plant,J.(ed): *Healing the wounds The promise of ecofeminism*. Between the Lines Press, Toronto, pp.174-185.

Valentine,G.(1989): The geography of women's fear. *Area*, 21, 385-390.

Warren,K.(1987): Feminism and ecology: making connections. *Environmental Ethics*, 9, 3-20.

Warren,K.(1988): Toward an ecofeminist ethic. *Studies in the Humanities*, 15, 140-156.

Warren,K.(1990): The power and the promise of ecological feminism. *Environmental Ethics*, 12, 125-146.

Warren,K.(ed)(1991): Ecological feminism, special issue. *Hypatia: A Journal of Feminist Philosophy*, 6-1, 1-214.

WEN(1989-92): *Newsletter*. Women's Environmental Network, 287 City Road, London EC1V 1LA.

WGSG(1984): *Geography and gender: an introduction to feminist geography*. Women and Geography Study Group. Hutchinson in association with the Explorations in Feminism Collective, London.

Wisner,B.(1978): Does radical geography lack an approach to environmental relations?. *Antipode*, 10-1, 84-95.

Wolf,M.(1987): *Revolution Postponed: women in contemporary China*, Methuen, Andover, Hants.

Wollstonecraft,M.(1972): *A vindication of the rights of woman*. Joseph Johnson, London.(ウルストンクラーフト著 白井堯子訳『女性の権利の擁護』未来社,1980)

Zimmerman,M.(1987): Feminism, deep ecology, and environmental ethics. *Environmental Ethics*, 9, 21-44.

解 題(神谷浩夫)

訳出した Nesmith and Radcliffe の論文は、エコロジカル・フェミニズム(以下エコフェミニズムと略)を地理学の視点から考察した数少ない試みのひとつである。エコフェミニズムの系譜をたどれば、『沈黙の春』を著したレイチェル・カーソンにまで行き着くといういう説もある(江原・金井, 1997)。しかし、エコフェミニズムが社会的注目を集めるようになったのは、1973 年のオイルショック以降におけるエコロジー運動の興隆であり、とくに 1979 年のスリーマイル島の原発事故、1986 年のチェルノブイリ原発事故が大きな契機となった。

日本においてエコフェミニズムといえば、青木やよ

ひに代表されるといっても過言ではない(青木, 1994)。しかし、実践と理論はかなりの隔たりがあるのも事実である。例えば、原発反対運動の際にしばしば掲げられるスローガンは、「生まれてくる子供の世代のために環境を守る」とか、「母胎を健康に保つ」云々であり、そこには、フェミニズムとエコロジーの理論的関連は明示的とはなっておらず、むしろ消費者運動や環境保全運動、反核・軍縮運動としての実践に傾斜している。

エコフェミニズムは、その言葉が示すように、エコロジーとフェミニズムの結合である。初期のエコフェミニズムは、(生殖・出産という行為に特徴的に見られるように)女性と自然との間には特別な結びつきがあり、子供を産む権利・産まない権利(リプロダクティブ・ライツ)が重要な論点となってきた。つまり、母性原理が重視されているのである。そこには、男性が文化的で自然を征服するものであるとする啓蒙主義的見方が色濃く反映されていると言えるだろう。訳出した Nesmith and Radcliffe の論文では、精神主義(スピリチュアル)フェミニズムやカルチュラル・フェミニズムの論客として、Griffin や Daly の名前が挙がっている。さらにエコフェミニズムの論点として重要なのは、男女の性差を可能な限り小さいものと考える「最小化論者(minimizer)」とできる限り大きい者と考える「最大化論者(maxmizer)」へと二分した場合、エコフェミニストは母性原理を重視するがゆえに最大化論者と見なされることが多かった点にある。

一方、「男性と文化」、「女性と自然」との同一視(いわゆる「本質主義」)を批判し、こうした結びつきの多様性を認め、女性間にみられる階級、文化、人種間の差異を重視することで二元論を克服しようとする論者たちもいる。そうした論客として、Nesmith and Radcliffe の論文では Merchant や King、Plumwood が挙げられている。

環境問題では、「母性主義」が前面に打ち出されることが多いのは紛れない事実であろう。日本の環境問題に関しても、リサイクル運動や石鹸運動、反原発運動、有機農業運動などの底流を形成している一つの草の根の思想として、「母親」が自分の子供たちだけでなく次の世代、未来の世代の子供たちの環境を守ろうとする「母性主義」が存在しているだろう。

こうしたエコフェミニズムの持つ諸側面に対して地理学的観点からどのようなアプローチが可能であるのか、というのが Nesmith and Radcliffe の論文における主要なテーマとなっている。彼女らの試論がどれほど説得力を持つか否かに関する評価は、もちろん読者に委ねられるべきものである。しかし、近年のわが国において脚光を浴びている環境問題に対するアプローチにも、ジェンダーのイデオロギーが色濃く反映されているというフェミニストによる指摘は、環境問題そのものを客観的な研究対象として考える必要性をわれわれに痛感させるであろう。こうした指摘は、環境保護運動を分析した岡島(1990)の中でも述べられているように、「シエラ・クラブ」や「全米オーデュボン協会」が白人の中産階級の男性を中心とした活動であった(そして現在でもそうした傾向は引き継がれている)という点と相通じている。

第三世界における環境保護運動の代表的な事例として、Nesmith and Radcliffe の論文では、インドにおけるチプコ運動が紹介されている。こうした「持続可能な成長」と密接に関連したエンパワーメント・アプローチが内包するジェンダーの視点に対して、日本の地理学はこれまで分析の対象としてこなかったことも事実である。そうした点からも、ここで訳出した Nesmith and Radcliffe の論文は、先進国・途上国における環境問題と開発問題、フェミニズムとの関連を考える上で大きな意味を持つであろう。

参考文献

青木やよひ(1994):『フェミニズムとエコロジー』新評論
江原由美子・金井淑子編(1997):『フェミニズム』新曜社
岡島成行(1990):『アメリカの環境保護運動』岩波書店